

現代中学生の夏休み

調査報告にあたって

お茶の水女子大学講師

耳塚寛明

この調査報告書のテーマは、「中学生の夏休み」である。

私たちが調査研究の必要性をことに痛感するのは、主として次のような場合であることが多い。第一に、人々の関心を集め、社会問題化しているテーマ。最近では、いわゆる「いじめ」や「高校受験」「通塾」などがそれに該当する。この場合、研究のねらいは、社会問題化している現象をできるだけ冷めた眼で観察・記述し、しかも問題化している現象に対して可能な限り効果的な対応策の提言を行うことに置かれる。冷静な観察と記述はともかくとして、後者の具体的で効果的な対応策の

提言は、通常容易ではない。しかし、テーマの性質上、具体的な提言を直接行うことは不可能にしても、現象の本質を見極め、原因を探る姿勢が要請されてくる。

第二のテーマは、いわば「隠れたテーマ」である。数多く調査が行われている状況にもかかわらず、エアー・ポケットのように人々の注視を免れてきた調査領域がいくつも存在する。中には、調査研究を行う必然性がないが故に(つまりテーマが重要性を持たない)、主題とされてこなかった領域がたしかに存在する。けれども、ことの重要性にもかかわらず、研究されてこなかったテーマは意外に多

い。このようなテーマを設定した場合、そこでの第一のねらいは、実態を幅広く観察して問題発見的に対象にアプローチすることになる。あらかじめ問題意識のない調査はありえないが、ここでの主要なねらいは問題の解決よりも問題発見に置かれる。

「中学生の夏休み」というテーマは、どちらかといえば後者に属するテーマだと私たちは考えている。中学生を対象とした諸調査研究を概観してみると、学校生活にかかわるテーマがかなり多いことに気づく。荒れる中学校などといわれ、いわば教育問題の多くが青年前期である中学校に集中している現実を考えれば、ごく当然のことだろう。しかし、中学生は学校生活だけを送っているわけではない。彼らの生活領域は、通常の学期中でも、学校以外の家庭、地域、塾などに及んでいる。そしていまひとつ、学期間の長期休業における生活がある。夏期休業の期間は短い地域では3週間程度から、長い地域では数週間に及ぶ。この間、中学生はどのような生活・経験をしているのだろうか。それは、中学生にとっては貴重な「脱学校的空間」であり、また学校からみても学業をはじめ学校生活のあり方に大きな影響を与えずにはおかない、重要な問題だろう。

私たちは、今回の調査では、まず中学生の夏休みの行動を、トータルに観察することを心掛けた。そのため、以下に示すようにやや総花的との印象を与えかねないくらい、調査項目は多岐に及んでいる。各調査領域の具体的なねらいは各章で述べているので、調査の内容を以下に示しておく。

- ①夏休みの学習； 学習の頻度／学習時間・時間帯／学習内容／宿題の消化のし方／使用した教材／夏期講習
- ②家庭での生活； 起床、就寝時間／朝食／手洗い／テレビなどマスメディアとの接触／父母などとのコミュニケーションの量

- ③行動経験； ハイキング、映画などの外出経験／旅行／スポーツ／逸脱的行動経験／友人との諸活動
- ④夏休みを振り返って； 楽しさ／計画と満足度／どんなタイプの夏休みだったか／2学期への期待
- ⑤フェース・シート； 性別／成績の自己評価／部活動／進路希望／父親の仕事／母親の仕事

報告書の第1部では、以上の領域ごとに分析・考察を行っている。また、第2部では特に「夏休みの地域差」に焦点を合わせて、中学生のどこに、どのような地域差が認められるのか、また地域差がない生活領域はどこであるのか、などについて検討している。子どもたちの生活から地域性が喪失しているといわれて久しいが、検討の対象を夏休みに限定して、このような「常識」を再検討したのが第2部である。

この調査報告書は、福武書店教育研究所の所報Vol.1として発刊するものである。調査の設計から分析、執筆にいたるまで、所員の時松史子、田中美幸、菅原雅子が担当し、耳塚が全体の統括と最終的な調整を行った。もとよりさまざまな制約から必ずしも十分な分析がなされているとはいえないかもしれない。読者の皆さんには、本報告書から、中学生の多彩な夏休み像を読みとっていただき、直前にひかえた夏休みにおける指導にご活用たまわれれば幸いである。

いつの場合でも、調査研究の最大の功労者は、調査対象者の方々である。今回も、対象者の中学生諸君が、自らの夏休みを調査票に回答することを通して、私たちに観察することを許してくれなければ、この調査報告書はありえなかった。最後に、調査対象となった中学生諸君と調査に種々ご協力をいただいた先生方にお礼を申し上げたい。